

平泉懐古

大槻碧溪

三世の豪華帝京に擬す

朱楼碧殿雲に接して長し

只今唯東山の月のみ有つて

来り照す当年の金色堂

【作者】大槻馨溪（一八〇一〜一八七八年） 享和元年五月仙台藩医玄沢（げんたく）の次男として江戸木挽（こびき）町に生まれ

る。幼名六治郎、または、進平、自瑞弘（思考）、豪ははじめ工員、後に盤珪、忌み名（忌み名）は正隆（清隆）。

幼にして慧敏（けいびん）、昌平黌に学びまた長崎に赴き蘭学を修業する。帰藩後西洋砲術や儒学に専念した。開国論

者にして親露排米説を唱えた。明治元年奥羽諸藩卒兵の際軍国文書司となり、新政府に捕らえられ終身禁錮に処せられた

が四年四月釈放され五月上旬し本郷に隠棲、明治十一年六月没す。七八歳。従五位を贈られる。

【語釈】\*平 泉：：岩手県にあり 東北本線平泉 \*三世豪華：：藤原清衡（きよひら） 秀衡（ひでひら） 基衡（もとひら）

の三代 奥羽の地を領し豪華を極めたこと \*金色堂：：平泉駅の西方二キロメートル 中尊寺の一仏塔 光堂ともい

う芭蕉の句に「五月雨の降り残してや金色堂」

【通釈】藤原氏三代の繁栄は豪華をきわめ、帝都当時の京都に似せて、朱塗りの樓台、碧色の殿堂が見わたす限り高く聳えていた。

今はただ当時の豪華さは、一場の夢となり、昔と変わらぬものは東山に上る月だけで、夜ごと来って当時の遺物金色堂を

照らしているのである、と栄枯盛衰の感慨をのべている。